

私の名前は* * *・* * * *です。私は13年以上にわたり、Interac(インタラック)で勤務してきました。2012年10月から2026年3月まで、ALT(外国語指導助手)兼ネイティブ講師として、東京の多くの区で英語を教えてきました。その間、私は勤勉かつ誠実に英語教師としての務めを果たしてきました。生徒や教師、そして学校と関わりを持てたことを、私は光栄に思い、喜びと誇りを感じていました。

私の経歴は、教師、教育者、そしてファシリテーターとしてのものです。私にとって、Interacでの仕事は意義深く、誠意を持って取り組むべきものでした。自分自身だけでなく、生徒や教師にとっても、自分の活動が前向きで有意義なものであると信じています。

Interacでの13年間の勤務中、私は一度たりとも自分を「パートタイム(非正規)の従業員」だと思ったことはありません。それどころか、任された数多くの業務は、私がJTE(日本人英語教師)と同様に学校の一員であることを強く認識させるものでした。ゼロから授業を計画し、独自の教材を作成することが求められました。ワークシートの準備やロールプレイ用台本の作成も行いました。昼休みも生徒や教師の対応に追われ、授業の準備や採点、さらには通常の授業時間中にテストを受けられなかった生徒への口頭テストを行うことも頻繁にありました。

こうした業務は、本来退勤すべき放課後の時間帯にまで及ぶこともありました。授業が連続して行われることも多く、義務付けられている休憩を取る時間さえありませんでしたが、それも当然のこととして求められていました。これらはすべて「日常的」なことであり、決して例外的な出来事ではありませんでした。月曜から金曜までの通常の勤務に加え、土曜日の午前中にも働かなければならないケースもありました。繰り返しになりますが、私はInteracでの仕事を「パートタイム」の仕事だと捉えたことは一度もありませんでした。

これが、Interacでの私の労働実態でした。しかし、こうした事実にもかかわらず、長年にわたり、適切な社会保険制度への加入を拒否され続けました。繰り返し説明された理由は、私の週の労働時間が29.5時間とされているから、というものでした。しかし、これは実際に行った業務の実態を反映したものではありません。学校にいたことが求められた時間、模範となるべき役割や担っていた責任、さらには会社や学校・教師から寄せられていた信頼といった要素も、全く反映されていませんでした。

今年3月、私はInterac(インタラック)社から解雇されました。今年で62歳になりますが、適切な社会保険制度に加入させてくれるような仕事に就ける見込みはほとんどありません。現在の私の状況は、私自身にとっても、また家族にとっても極めて不安定なものです。適切な社会保険に加入させてもらえないままInterac社で長年働かされた結果、年金受給額は不十分となり、資金も著しく不足しています。そのせいで、将来の生活の保障が全く見えない経済的危機に陥っています。

私は、この問題が決して私個人の境遇にとどまるものではないと確信しています。私と同様に、実際の業務実態とはかけ離れた契約内容のまま、長年にわたり学校現場で働いてきた外国人および日本人の教育関係者が数多く存在します。

多くの人々と同様、私もまた、正規の学校職員と同等の業務を期待されながら、雇用主が契約書に実態とは異なる(低い)数値を記載したために、年金受給権を失うことになりました。長年にわたり誠実に職務に励んできたにもかかわらず、適切な社会保険制度に加入させなかったという同社の行為によって、私は取り返しのつかない損失を負わされました。

この不当な扱いについて、裁判所にその実態と、それによって将来の経済的安定が奪われた現状を理解していただきたいと切に願います。最後に、この重大な不正を世に知らしめてくださった弁護士の方岡先生と村住先生に心から感謝申し上げます。そして、ゼネラルユニオンの皆様にも深く感謝いたします。もし皆様の存在がなければ、私は不公正という荒れ狂う海を漂う、ただ

の漂流物になっていたことでしょう。これまでの変わらぬご支援とご尽力に、心より御礼申し上げます。感謝を込めて。ありがとうございました。